私の授業実践

教育現場の最前線から

学生にとって〝気づき〟が得られる場をつくるために

井上 慶太 ● 成蹊大学経済学部助教

初学者に対して、専門的な内容をいかに分かりやすく教えるかということは、多くの教員が直面する問題ではないだろうか。私の所属する成蹊大学経済学部でも、会計学や経営学などビジネス関連の入門科目がある。ただし、受講するのは、高校を卒業したばかりでビジネスにあまりなじみがない学生である。そうした学生に対してどのような伝え方をすれば理解されやすいかは、授業を準備するたびに悩むところである。私が意識しているのは、学生が授業のなかで新たな〝気づき〟を得られるようになるためのサポート役となることである。

私自身、教育現場の経験が浅く、こうした意識をもつようになったのはごく最近である。きっかけとなったのは、日本私立大学連盟が主催するFD推進ワークショップの模擬授業に参加したことである。ほかの先生方の授業を聴くと、ごく身近な題材を入り口として、授業内容について受講生が主体的に考えるための取り組みをなさっていたのが非常に印象に残った。また、このワークショップに参加する以前には、私は大人数の授業で学生主体の授業を行うのは難しいと思っていた。しかし、参加された先生方とのディスカッションを通じて、工夫次第でいろいろなことができるのだと気づいた。ワークショップに参加したあと、自分が担当する授業でも学生が自ら考える場を設定できないかと考えるようになった。

そこで始めたのが、シンプルなストーリーを通じてグループワークなどで考えるというものである。たとえば、Aさんが経営や会計などビジネスに関する知識をもたずに飲食店を始めたところ、はじめのうちはお客さんが来て売り上げが増えたものの、悪天候やライバル店の影響などから次第に利益が減っていき、最後は資金不足で閉店に追い込まれてしまう、という流れである。このストーリーを学生と共有した上で、何が問題でどのように改善できるかを個人やグループで考えさせ、全体で共有する。この取り組みから、学生はビジネス（たとえば、お金のマネジメント）を学ぶことの重要性や、専門的で難しい

ようにみえる内容が、実は自分の生活と強く結びついていることを体感し、その後の学修へとつながっていった。

はじめのうちは教室で発言することに戸惑う学生もいたが、いろいろな意見が出てくるなかで自ずと積極的に発言する学生が増えてきた。全体で意見を共有してみると、当初私が想定していなかったような面白いアイディアもたくさんあって、予定を変更してさらに学生と一緒に考えたこともある。また、専門的な内容について説明するとき、以前に比べると積極的にノートを取ったり質問したりする学生が増えたことも大きな変化である。

さらに、グループワークをしてだいぶ時間が経ってからのことだったが、アルバイトをしていて授業で考えたことをふと思い出して「なるほど！」と思うことがあった、というコメントももらった。こうした学生の反応をふまえ、授業で自分なりに〝気づき〟が得られるような場をつくることがいかに大切であるかを私自身も学んだ。

私が担当しているのは大人数の授業であって、グループワークなどを行うといろいろな問題に直面する。もっとも難しいのは、学生の取り組み度合いをどのようにフォローするかということである。関心をもって参加する学生はたしかに多いのだが、なかには非協力的な学生が出てくることもある。しかし、教員側がそれぞれの学生によるコミットメントの度合いを把握するには限界があり、学生から指摘されて気づくこともあった。また、当初想定した以上にグループワークに時間を要してしまい、全体による振り返りの時間が減ってしまうこともあった。学生主体の取り組みを取り入れた当初は、こうした問題に直面するたびに改善策を考えていたが、次第に、学生とのルール決めを徹底することなどによって改善できるようになってきた。それでも、グループワークとレクチャーの時間のバランスをどのように取るのかなど、改善すべき課題は山ほどある。

学生主体の取り組みを採用することにより、教員にも重要な学びの場ができる。これまでも、学生のコメントや要望を参考にして授業の内容や進め方を見直すことができた。学生のニーズにどこまで応えるかという問題はあるものの、それでも一人一人の学生としっかり向き合うことによる効果は大きい。私自身の経験を踏まえてみても、自分なりに考えて取り組んだことが学生にとって貴重な財産になる。そのサポート役として、教員の役割は重要である。学生と教員双方にとってより多くの〝気づき〟が得られるように、試行錯誤を続けていきたい。

データサイエンス学部の挑戦

〜新分野・新学修スタイルの新結合による教育イノベーション〜

上林　憲行
武蔵野大学データサイエンス学部長

1　武蔵野大学の躍進

武蔵野大学は、2019年度に新設した経営学部とデータサイエンス学部を加えて11学部19学科を擁し、2024年度に開学100周年を迎える総合大学である。建学の仏教精神を根幹に据えた、新ブランド「世界の幸せをカタチに」を制定し、新しい大学像を希求している。本年春の入試では、志願者数が前年比160%強、伸び率では全国一となるなど、躍進著しい。

本稿では、1期生を迎え入れたデータサイエンス学部の挑戦と学修イノベーションを紹介する。

2　データサイエンス学部

本年の入試では、新学部の入学者定員70名に対して、総志願者数は1800名に迫る勢いであった。新学部の広報が2018年6月中旬以降のため、出遅れ感は否めなかったものの、幸いにも、矢継ぎ早に、データサイエンスやAIなどの21世紀を見据えた新しいスキルを持つ人材育成の提言や具体的な施策の発表などが内閣府、文部科学省、経済産業省などから続き、社会的な追い風に恵まれた。その結果、夏休み前後からオープンキャンパスでも多数の受験生・保護者の来学を得ることができ、教員も驚くほど、熱心に学部の説明や研究成果のデモに見入っていただき、手応えを十分に

感じるようになった。初年度ではあるが、大変好評のうちに入試を終えることができた。新しい分野の新しい学部に1期生として入学した新入生からは、入学前からさまざまな提案をいただくなど、教員と共に新学部を構築する熱意と行動力が伴った学生が集まった。

3 学修イノベーション

データサイエンス学部の学修イノベーションのキーコンセプトは、スマートデータサイエンス（新分野）とスマートラーニング（新学修スタイル）の新結合で表現できる。

新分野であるデータサイエンスの学問領域と、学習者中心の新しい学修スタイルの新結合によって、自ら学ぶ力、ラーニングアウトカム、多様性の中の実践学習コミュニティを重視した21世紀型の学修スタイルのイノベーションを進める考えである。

3・1 進化するデータサイエンス

データサイエンス自身が、ある意味で新しい学問体系の構築を目指す進化系の学問領域である。本学が目指すのは、数理的・統計的な枠組みでデータを分析するデータサイエンスを超えて、データを燃料や原材料に、機械学習・深層学習などをエンジンとして、新しい価値の創出を希求するスマートデータサイエンスの構築であると考えている。そのため、シンギュラリティに代表されるコンピューターや人工知能の技術革新を取り込んで進化・変容し続けるデータサイエンスを前提として、その変化にしなやかに対応できるレジリエンス力をベースにした専門知識・汎用スキル・学修力の実践的修得に主眼を置く教育方針を掲げている。

3・2 スマートラーニング

スマートラーニングの主たる目的は、体系化された知識の効率的な修得から、革新著しい教育テクノロジーやサービスを取り込み、知識の修得（内化）にとどまらず、その知識を活用して成果物を作成する（表出）までのプロトタイプ能力を育成し、ラーニングアウトカム（学習成果）を最重要視した本格的な取り組みを目指すことにある。さらに、変化著しい不確実性の時代にあって、新しい知識を学び続ける「自ら学ぶ力」の体得こそ大事であると考えている。

(1) 学習者中心・ラーニングアウトカム志向

19世紀型教育スタイルの残滓である知識移転型教育を前提とした、教壇型教室における座学形式の教育・

学習スタイルを一新したいと考えている。学生に自律的能動的な学習スタイルをより一層促すには、伝統的な座学的教育スタイルからの脱却が急務である。すなわち、他律的・受動的な構図を基本とした教育スタイルを温存しつつ、補完的にアクティブラーニングを施すことの限界を打破する必要があると考える。学習者中心、ラーニングアウトカム志向、自律的能動的な学習参加などを統合し、目的や文脈から切り離された知識修得教育から、目的や文脈と統合された知識・スキル・コンピテンシーが融合した実践知の修得を目指す新しい学修スタイルを探究する。そのために、グループ協調学習を基調とする教室環境の整備を予定している。

(2) 実世界イシューとプロジェクト型学習志向

本学部では、実世界と隔離されたトイモデルをベースに学習を進めるのではなく、実世界・実社会のイシューを取り上げ、その課題に挑戦することを念頭に、プロジェクト型学習・教育プログラムを最重視したカリキュラムを編成している。具体的には、未来創造プロジェクトを1年後期から3年前期まで毎期設定している。このプロジェクトの参加を通じて複数の専門教員の薫陶を受けられる機会を提供するとともに、幅広い先端領域への関心や課題について体験的に理解を広げつつ、主体的な問題意識の醸成と具体的な課題解決の方法論を反復的に身に付けることをねらっている。

また、武蔵野大学のブランドステートメントである「世界の幸せをカタチに」を教育現場で具体的に展開するために、国際連合が推進しているSDGs（持続可能な開発目標）の課題にも意識して取り組む予定である。今春、本学では、そのための全学的なメッセージであるSDGs宣言を発表している。

(3) サイバー・フィジカルな学びの空間と実践学習コミュニティ志向

本学では、物理的な教室空間における学びにとどまらず、コンピューター能力とネットワーク環境を駆使したサイバー空間に学びの場を設定するスマートキャンパス構想を進める予定である。学生は、スマートフォンに代表されるモバイル情報端末とネットワーク環境を活用すれば、教室と時間の物理的制約から解放されて、自由に、いつでもどこでも（どこからでも）学ぶことが可能な社会基盤が整ったと考えられる。さらに、メディア化・コンピューター化された対話的な教材やサービスを通じて、学生個々の目的や習熟度、進行に

応じて反復的に学びを教授することが可能となる。

推薦入試によって早々と入学を決めた学生に対し、入学前学習の機会をサイバー空間上に提供した。グループ活動を通じて、新学部に期待する提案を具体的な成果物として表現するために、プロトタイプツールとしてマインクラフトを提供し、グループ編成も含めて自主的に行わせた。学生の自主性、自発性、自律性を最大限に尊重し、その可能性を最大限に発揮させる取り組みである。その活動の成果を初顔合わせの学科ガイダンスで発表（デモ）させたところ、教員も驚くほどの出来栄えであった。このように良い環境・ツールを提供し、自律的・能動的姿勢の下に実践コミュニティの中で試行錯誤を許容した成果志向を伴う学修アプローチの有効性について、手応えを得るとともに、教育のあり方の可能性について確信を得ることができた。

4 社会連携志向の教育実践

さらに、本学およびデータサイエンス学部の学びの場を拡張する目的で、企業などのビジネスセクターやパブリックセクターと協力して研究・教育を進めるための包括連携協定を進めている。社会の第一線における実体験を通じて視野を広げ、実践知のトライアルの場を提示することは、学生の成長に大きく寄与すると考え、複数の社会実践参加を奨励し、そのためのインセンティブとして単位を設定している。

新年度早々、この分野のリーディングカンパニーである帝国データバンク社およびインテージホールディングス社と武蔵野大学の包括連携協定の調印式が、西本照真学長臨席の下で行われた。

また、データサイエンス学部の教育現場では、この分野の世界的な先端企業と教育連携を図るとともに、その認証を受けて、最先端企業が実際に活用しているツール、サービス、教材を利用可能な連携も進めている（NVIDIA社など）。

株式会社帝国データバンクとの
包括連携協定調印式

株式会社インテージホールディングス
との包括連携協定の調印式

学園の使命と将来構想

保坂 邦夫●学校法人昭和女子大学学園本部広報部部長

はじめに

昭和女子大学の前身、日本女子高等学院の誕生は1920年。2020年に創立100周年を迎える。東京都文京区にあった幼稚園を間借りして教室を構え、第1期生8人、専任講師5人でその第一歩を踏み出した。創立者は雅号・東明として文壇で活躍した詩人・人見圓吉。緑夫人と共に学園の門扉を開いた。第一次世界大戦直後の荒廃した時代の中で、愛と理解と調和を旨とし、新しい文化の創造と社会の発展に進んで貢献する女性の育成という大きな教育目標を掲げている。

1945年、学園は数度の移転を経た後に、現在の世田谷区太子堂に校舎を構えた。ここは旧陸軍近衛野戦重砲兵連隊跡地。荒れ果てた敷地も、今では緑豊かなキャンパスに変わった。最寄り駅は東急田園都市線の三軒茶屋。駅から徒歩7分に立地する。

学芸学部1学部で創設された大学は、2018年度に5学部14学科にまで成長した。この間、グローバル人材の育成とキャリア教育の充実を中心に据え、カリキュラムの充実を図り、近年は国内外のさまざまな資源と連携し、教育環境の充実に努めてきた。

理事会は、2002年9月に『学園の「使命」MISSIONと「将来構想」VISION』を表明し、具体的な行動に着手した。さらに、2006年1月には5年間の「長期計画」を打ち出し、現在は2017年2月からの「中期方針」に沿って事業を進めている。

今回は三つの視点から、その動きを紹介したい。

キャンパス全景

1　社会とつながる

学園は、2005年に特定非営利活動法人NPO昭和を設立し、地域の子ども子育て支援を開始した。世田谷区から保育所や子育てひろば、一時預かりなどの事業を受託し、本学大学院生活機構研究科附属生活心理研究所が発達相談を担当するなど、世田谷区の子育て総合施設を運営している。また、2008年度からは世田谷区立男女共同参画センターの管理運営も受託している。こうした地域連携を推進するため、2014年には世田谷区と包括協定を締結している。

学内で毎年開催する子育てイベントは、地域と一緒に子育てを支援することを目的としている。世田谷区の施設や地域の子育て支援団体が集まり、それぞれの活動を来場者にアピールする。学生も運営に関わり、区の活動や地域の課題を学ぶ機会となっている。多くの子育てファミリーが集まり、盛況である。

NPO設立と同時に、学内にコミュニティサービスラーニングセンターを開設。社会福祉法人世田谷ボランティア協会と連携し、地域で活動する学生のサポートを充実。ボランティア活動前後の学習を含め、大学の正規単位を

太子堂移転後の正門

修得できるプログラムとしている。
現在では、公立校授業サポート、放課後居場所づくり、外国人児童支援、商店街活性化、コミュニティFM番組制作、公的施設運営支援など、地域のさまざまな場面でボランティア活動を展開している。
学んだ知識を生かして地域と協働する。都市型環境が生み出す現代的課題を発見し、どうすれば解決するかを考える。ＮＰＯを軸とした連携で、学生たちが地域をフィールドとして深く学べる環境が整備できた。
なお、この事業構想は２００５年度の文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラムに採択されている。
また、キャリア支援も社会とつながっている。２０１1年度にはキャリア支援センターが社会人メンター制度を開始。３００人以上の20代から50代を中心とする社会人女性がメンターとして大学に登録。学生の質問や相談に応じている。メンターのうち、学園の卒業生は約2割。商社や銀行、出版、教育、建築など幅広い職業と、海外生活や子育て経験など多様な働き方や人生経験を持った女性が在籍している。データベースを利用して、興味のあるキーワードで探すことができる。また、ロールモデルとの出会いで、在学中から生涯のキャリアを考えることも可能である。
２０１７年度にインターンシップを受け入れた事業所は２４５カ所、参加した学生は５４５人であった。

２　企業とつながる

２０１３年4月には、グローバルビジネス学部ビジネスデザイン学科を開設。英語力とビジネスセンスを磨くカリキュラムは女子大学初。海外留学が必修、企業とのプロジェクト活動が特長であり、当初から多くの入学希望者を集めた。
同時に開設したのが現代ビジネス研究所である。企業・行政機関などで実務経験を持つ、公募で選ばれた社会人

が研究員として所属し、自らの研究活動を行っている。また、個人の研究活動だけでなく、学生のさまざまなプロジェクト活動を支援していて、現代ビジネス研究所は、大学と企業・団体と協働するプラットフォームという役割を担っている。

これまで取り組んできた学生と企業の協働プロジェクトは多種多彩であり、大学教員が指導を担当し、企業は学生に課題を与える。学生は解決策を考えて企業にプレゼンテーションする。実際の商品開発と同様に厳しく審査され、何度も修正する。教室では得られない機会を企業が与えてくれている。また、開発に大学生・若い女性の視点を取り入れることのできる点が、企業にも好評である。

一例を紹介すると、ジェットスター・ジャパン株式会社に国内線初採用のホットミールのレシピ提供がある。また、日本ケンタッキー・フライド・チキン株式会社とは、20代から30代の女性をターゲットとする弁当を共同開発した。さらに、株式会社早川書房とは、ハヤカワ・ミステリ文庫内に女性向けの新レーベルをスタートさせて、文庫5冊を発刊している。表紙デザインから訳者あとがきまで、全てに学生が関わった。

他にも、コミュニティFM局の番組制作、フェスティバルや映画祭の企画・運営、伝統工芸品のリデザイン、地方の観光活性化など、さまざまな現代的課題に取り組んでいる。

2017年度に活動した企業協働プロジェクトは117件だった。

3　世界とつながる

学園は1988年、米国マサチューセッツ州ボストンに海外キャンパス・昭和ボストンを設立し、英文系の学生は1学期のボストン留学を必修とした。当時は学科の学生全員を留学させる大学などなく、メディアの注目を集めた。海外で半年学んでも、4

昭和ボストン

年間または2年間（短期大学部）で卒業できるのも魅力だった。現在では、海外協定大学と連携し3学期までの長期留学プログラムを運営している。

また、長期休暇中に全学生が参加できるプログラムも運営している。心理学やホスピタリティ、ボランティア、アートといった各学科の専門分野をテーマに、ボストン市内で体験的に学ぶことができる。

２００９年には人間文化学部国際学科を設置。英語プラス1言語の語学力を日本と海外で磨くカリキュラムにより、欧米やアジアに留学する学生が誕生した。協定大学が世界中に広がったのである。

そして、誕生したのがダブルディグリー・プログラム。中国・上海交通大学、韓国・ソウル女子大学と協定を締結し、5年間で本学と協定大学の両大学を卒業できるプログラムである。２０１８年度には、上海交通大学とのダブルディグリー・プログラム第1期生10人を輩出した。

文部科学省の「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援事業」が終わり、２０１７年度に受けた事後評価書の中で、本学は「取り組み前に8大学だった海外協定校数を29まで増やすなど、グローバル化の推進、教育課程の国際通用性の向上、国内外への教育情報の発信等を着実に進めており、成果を挙げている」と評価され、最高の「S」評価を得たのである。海外協定大学の数は、まだ増え続けている。

２０１７年度に実施した必修の昭和ボストン長期プログラムは7プログラムあり、履修者は３１４人だった。また、4週間の延長プログラムには15人が参加。全学生対象の夏期プログラムには72人が参加。ほかにも、春秋の15週間プログラムに17人、栄養士や教職関係のプログラムに84人、合計５００人近い学生が昭和ボストンで学んでいる。

また、各学科で実施した海外宿泊研修は21プログラムに２６４人が参加、海外協定大学へは18大学に80人を派遣している。海外で学ぶ機会を豊富に設定している。

２００６年9月、学園は各種学校ブリティッシュ・ス

現在の正門

クール・イン・トウキョウ昭和を開校した。英国式カリキュラムによる授業を行う学校であり、4年生から13年生まで600人以上が学んでいる。3年生以下の生徒は渋谷の校舎に通っていて、校舎は附属中学・高校と隣接しており、日常的な交流を可能としている。

2019年には、テンプル大学ジャパンキャンパスの校舎が本学構内に移転する。カフェテリアやジムなどは既存の施設を共有する計画であり、学園のグローバル化が加速する。距離が近くなって、互いの授業を履修しやすくなるため、昭和ボストンから帰国した学生が継続してグローバルな環境で学ぶことが可能となる。

同大学は米国ペンシルベニア州立大学の日本校である。従って、単位互換だけでなく、FDやSD、公開講座などを共催することにより、カリキュラムのグローバル化と教育課程の国際通用性を向上させていく計画である。

4　夢を実現する七つの力

グローバル化が進み、高度な先進技術の導入で課題が解決し、超スマート社会が世界をリードするといわれている。そうした社会で役割を担うには、どのような力が必要なのか。

2010年、本学は身に付けるべき七つの力を学生に示した。

(1)　グローバルに生きる力

日本の伝統や文化を大切にできる。世界の地理や歴史を知っている。地球環境や経済の動きに関心を持っている。いろいろな国の文化に偏見や差別感を持たない。芸術を鑑賞し、味わい、感動できる。礼儀正しく振舞い、相手の立場を尊重できる。

(2)　外国語を使う力

仕事で必要となる英語を読み、書ける。外国人と話し、聴きとれる。TOEFLやTOEICなどの試験を受験して、得点を伸ばせる。英語以外の外国語の基礎的な知識を知っている。

(3)　ITを使いこなす力

コンピューターの基礎的な操作方法を知っている。仕事で必要なワード、エクセル、パワーポイントを操作できる。専門学習に必要なソフトウェアを使い、レポートや作品を作成できる。インターネットを活用して、情報

を集められる。インターネットの便利さと危険性を知っていて、安全に利用できる。

(4) **コミュニケーションをとる力**

笑顔で挨拶し、誰とでも気持ちよくつきあえる。自分に似合う服装を選び、姿勢に気をつかえる。文章や言葉を読んで理解し、要点をつかめる。人の意見を素直に聴き、自分の意見をきちんと伝えられる。漢字や慣用句を正しく使い、レポートや手紙を書ける。人前で堂々と話せる。文字、イラスト、グラフ、動画、身体表現を使い、分かりやすくアピールできる。

(5) **問題を発見し目標を設定する力**

ものごとをいろいろな角度から見て、原因や問題点を発見できる。問題をどう解決するか、いろいろな方法を考えて提案できる。みんなで話し合い、目標を設定できる。いつまでに何をしなければならないか考え、優先順位を決められる。

(6) **一歩踏み出して行動する力**

前向きに考え、新しいことに挑戦できる。人に頼らず、面倒がらずに仕事や役割を引き受けようとする。苦しいことがあっても、あきらめずにやり遂げようとする。小さな成功を積み重ね、自信に結び付ける。みんなで力を合わせ、役割を分担してチームワークを発揮できる。

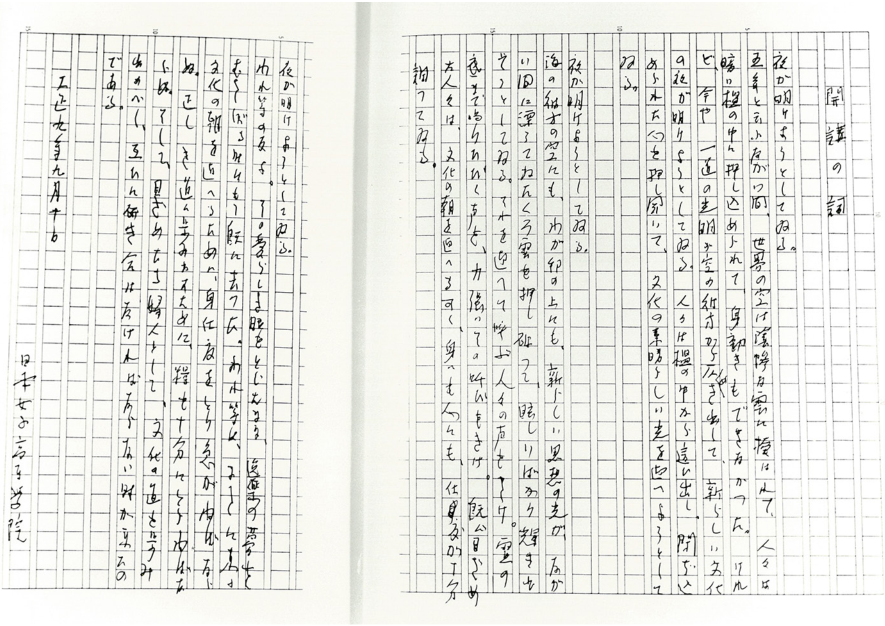
(7) **自分を大切にする力**

健康的な生活習慣を心がけている。自分の魅力や長所を見つけ、伸ばそうと思える。自分の足りない所や欠点に気付いている。落ち込んでしまった時、自分を励ますことができる。反社会的な行為から身を守る知恵を持っている。社会のルールを理解し、自分の行動に責任を持てる。自分を好きになれる。

社会とつながり、企業とつながり、世界とつながることによって育成するのは、こうした力を備えた人材である。

創立100周年は、ひとつの通過点である。創立者の開講の詞には、建学の精神を次のように記している。

夜が明けようとしてゐる。
われ等の友よ。その愛らしき眼をとじたまま、逸楽の夢をむさぼる時はもう既に去った。われ等は、ま


開講の詞

夜が明けようとしてゐる。

五年と云ふながい間、世界の空は陰惨な雲に掩はれて、人々は暗い檻の中に押し込められて、身動きもできなかつた。けれど、今や一道の光明が空の彼方から広がり出して、新らしい文化の夜が明けようとしてゐる。人々は檻の中から這ひ出し、閉ぢこめられた心を押し開いて、文化の素晴らしい光を迎へようとしてゐる。

夜が明けようとしてゐる。

海の彼方の空にも、わが邦の上にも、新らしい思想の光が、ながい間に漂ふてゐたくろ雲を押し破つて、眩しいばかり輝き出そうとしてゐる。それを迎へて叫ぶ人々の声もする。霊の底までゆらめく声を、力強いその叫びもきけ。既に目ざめた人々は、文化の朝を迎へるべく、身にも心にも、仕度が十分調つてゐる。

夜が明けようとしてゐる。

われ等の友よ。その素らしき眠をとじたまゝ、退屈の夢をむさぼるべき時はもう既に去つた。われ等は、まさに来る文化の朝を迎へるために、身仕度をとり急がねばならぬ。正しき道に歩み出すために、糧を十分にとらねばならぬ。そして、目ざめたる婦人として、文化の道を歩み出すべく、互ひに研き合はなければならない時が来たのである。

大正九年九月十日

日本女子高等学院

創立者直筆の「開講の詞」

さに来る文化の朝を迎へるために、身仕度をとり急がねばならぬ。正しき道に歩み出すために、糧を十分にとらねばならぬ。そして、目ざめたる婦人として、思慮ある力強き婦人として、文化の道を歩み出すべく、互ひに研き合はなければならない時が来たのである。

大正九年九月十日

日本女子高等学院

建学の精神に従いながら、時代が求める人材を育成するために、今後もカリキュラムを充実させ続けることが、本学の使命と考える。